

「相中相高百年史」より (戦時体制下の相馬中学校 14)

10 学徒動員：三年生（相中第45・46期生等）・・・ペンをハンマーに
《 横浜・海軍航空技術廠支廠へ出動 》

(5) 学友、黄泉の客となる（その1）

それは、忘れもしない、1945（昭20）年6月10日のことである。この日、徹夜作業を終えた菊地了（あきら）・桃井可生（かせい）・南原文夫の三名は、技術廠から寮に帰ろうとしていた。伏見猛等はその日は丁度日曜日だったが出勤で工場にいた。それを紹介する。

伏見猛^(※1)が出勤して間もなく、空襲警報になり、この三人に出会った。「少しの間だから待った方がいいよ」と、伏見が止めたが、「いや、いつものことだから大丈夫……」と振り切るように三人は帰っていった。この頃は休みも少なく、「月月火水木金」を合い言葉に、日曜も返上して勤務する日が続いた。この頃は、月にわずか二回の休みが与えられるだけだった。

それだけに、徹夜作業明けの休みが待ちどおしかっただろう。毎日の過酷な労働からちょっとの間だけでも解放されたかったのだと思う。その気持ちは痛いほどよく分かる。我々だってそうだった。一目散に帰って行ったばかりに、ボーイング B29 の爆撃に遭遇してしまったのだ。

吉田勉^(※2)は、その時現場近くにいた。その朝、空襲警報解除のサイレンがなった。空を見上げると、米軍爆撃機 B29 が南方洋上に悠々と引き上げるところであった。その時、ピーピーピー……ガサガサ……と聞き慣れない音がした。何の音か分からずぼんやり立って居た。そばに居た兵隊達は地面に伏せていたので彼も伏せた。伏せるやいなや、ドカンドカン……という音がして吹き飛ばされた。ボーイング B29 から落とされた爆弾の音だったのである。起き上がるや否やガンと耳なりがした。しかも、頭上からは板切れや砂塵が雨あられのように降り注いできた。

急いで寮に帰ったが、南原・菊地・桃井はまだ帰っていなかった。暫くして桃井可生が一人で帰ってきた。髪を逆立て（私は初めて逆立つ髪形を見た）、青白い顔で、足を引き摺り引き摺り、言葉も満足にでない有様である。あっちこっち怪我しているので、あり合わせの葉で何とか手当をした。そのうちに、少し落ち着きを取り戻して語るには、湘南富岡駅までは三人一緒に来たが、下車してからは桃井は腹の調子が悪くて三人で駆ることができず、彼だけ遅れてしまった。その時ピーピーピーの爆弾投下に遭ってしまい、桃井は、近くのトンネル入り口の下水に叩き付けられたようだ。二人はどこにいるかわからない、ということだった。

そこで早速、桃井の案内で菊地・南原をさがすことにした。富岡駅までの途中の家という家はことごとく吹き飛ばされ、生き残った家族は震えながら、抱き合ってただおろおろ泣いているだけ。富岡駅近くのガード下は、逃げ込んだ人達の死体が山のよう、折り重なってダラダラ……と血を流している。路面は真っ赤な血の海で、息がつまりそうだ。水道からは水が吹きだし、トンネルの中もガードと同じように死体の山。電車が止まって居たが、目にはいったのは四両編成で窓ガラスのない窓枠や台車だけだった。

ボロボロの車内を見ると運転手は息絶えていた。女の車掌は、胴部から上下真っ二つに切断され、髪はザンバラの上体は血だらけ、腕章をしたままの姿で爆死している。何とも痛々しいかぎり。まだ二十歳にもなっていないだろう。トンネルの入口と出口に爆弾が落ちたようだった。すなわち、写真の京浜急行線富岡駅近くのトンネル両側に爆弾が落とされたのだ。



京浜急行線富岡トンネル
菊地、南原両君はこのトンネルに退避したのだが……。

トンネルの、横浜よりの入口も死体の山であった。まさかと思いながら一人一人確かめているうちに菊地に似た人が見つかった。歯並びと、着衣の一部に特徴があり菊地ではないかということになった。遺体の一部は土の中に埋まり、前額部と胴体部の肉の大部分ははぎ取られて血だらけ、直撃に近い状態だったのだろう。

一旦寮に戻り、高熱をだして休んでいた太田先生に無理やり起きていただき、寮にいた友人西山種大等と共に現場に行った。皆で菊地であることを確認し、毛布に包み戸板にのせて、無言の帰寮となってしまった。

南原も近くにいると思い、友人とスコップで土砂をすくいかけた。手が見えた。手首のところに配給になった下着の袖が見え、足の部分にゲートルが残っていた。スコップで掘るのをやめて、手で土砂をすくいかけたら腹・胸・頭がでてきた。両手ですくい取るようにして南原の遺体を毛布の上に乗せた。

西山種大（たねお）^(※3) は、このときの様子を次のように回顧している。

我々と一緒に探しにいった下さった太田先生は黄泉の客となってしまった菊地・南原の変わり果てた姿をみて、彼等の頭と顔をなでながら、「こんなになってしまっ、こんなになってしまっ……」と、何度も何度も撫でているのだった。太田先生の悲しみ、苦しみ、そして生徒に対する愛情が痛いほど伝わってきた。

無邪気な顔のままであったのがせめてものすくいであった。寮の食堂に遺体の仮の安置所が作られ、同じ寮でともに暮らした大学生等の遺体も一緒に安置された。この寮で亡くなった者は十名を越えていたようだ。

その夜は通夜。安置された遺体と共に、西山等数名が当直にあたった。だが、無理をした太田先生は高熱のため意識不明になってしまった。このままでは危険、急いで横須賀の海軍病院まで運ぶことにした。時間は夜中の十二時を少し回っていた。雨も降っている。しかし事は急を要する。やっと見つけたリヤカーに太田先生を乗せ、約七キロの道を吉田、菅野、西山の三名で運んだ。病院に着いたとき、夜は白々と明けていた。数日後、太田先生は快方に向かった。

次の日の六月十一日、川崎から岩崎、渡辺の両先生が弔問に駆けつけた。南原・菊地の両君や他校生の遺体の枕を並べてこれから火葬にするという時であった。火葬といっても何も無い。土を少し掘って木材や藁を敷き、死体をよこたえ、その上にまた藁や木を積んだだけの火葬である。先生方も生徒も三々五々立ったり材木に腰掛けたり土に腰をおろしたり、火をじっと見つめて、もの言う者は誰一人居ない。まことに野辺の送りそのものである。明朝、陽の昇らぬうちに骨を拾うのだという。

(※1) 中第45回 昭和21年卒 金房出身

(※2) 中第46回 昭和22年卒 中村出身

(※3) 中第45回 昭和21年卒 中村出身